

十五世紀の日朝間で授受した禽獣

國 原 美佐子

はじめに

十五世紀の明を中心とする東アジア世界は、政治的側面(外交)と経済的側面(貿易)が未分離のままであった。このような状況のもと、日本と朝鮮の間を様々な「モノ」が人とともに往来した。日朝関係を詳細に記録した『朝鮮王朝実録』(以下、『実録』と略す)をみれば、日本から朝鮮国王への献上品及びその見返りである回賜品について知ることができる。日本から朝鮮への献上品として、日本の美術工芸品や南蛮産の胡椒⁽²⁾を挙げることができる。また、日本は、高麗版大蔵経や仏具の類を請求し、これらが朝鮮からの回賜品となったことが知られている。

ところで、『実録』によると、献上品・回賜品には、様々な種類の禽獣が含まれていたことがわかる。

動物は、国家と国家を媒介する役割を担う場合がある。古代以来現代まで、希少性ゆえに動物が外交上大きな役割を果たしていることはいうまでもない⁽⁴⁾。

本稿では、『実録』に記載された外交使節(「国家間メデイーター」⁽⁵⁾)としての動物から十五世紀の日朝関係について考察したい。なお、本論文においては、琉球は日本に含めないが必要に応じて言及していく。

一、対馬海峡を渡った動物達

十五世紀に時期を限っても、『実録』には様々な動物に関する記事がある。そこで、本稿では「外交使節」としての動物を、以下の条件を満たすものと定義した上で論じていく。

- 一、食用ではないこと
 二、進献品もしくは回賜品としてもたらされたもの
 この条件に従って、『実録』より「外交使節」の役目を負つ

た動物の記事をまとめたものが次表である。なお、本文で言及する琉球から朝鮮への進献動物(四件)もこの表に収めた。

表 『朝鮮王朝実録』記載の動物授受

	年号	西暦	月	日	授者	受者	種類	数量	備考
1	太祖一	一三九一	六	乙亥	肥前太守	太祖	馬	一匹	
2	太祖三	一三九四	七	庚戌	梵明	太祖	猿子		朝鮮僧梵明(今川了俊の使者と帰国)が持ちかえる。司僕寺におくことを命じる
3			一〇	壬申	太宗	源了俊	鶺鴒	三雙	了俊の要請による
4	定宗一	一三九九	七	朔	宗貞茂	定宗	馬	六匹	
5	定宗二	一四〇〇	四	癸丑	宗貞茂	定宗	馬	一〇匹	
6					沙彌靈鑑	定宗	馬	六匹	沙彌靈鑑は宗頼茂(貞茂父)の事
7			八		源定	定宗	馬	二匹	源定は駿州太守と称す
8			九		沙彌靈鑑	定宗	馬	六匹	
9	太宗一	一四〇一	一	乙酉	沙彌靈鑑	太宗	馬	六匹	
10			六	乙亥	肥州太守	太宗	馬	三匹	
11				乙酉	沙彌靈鑑	太宗	馬	四匹	対価として虎豹皮などをもらう
12			九	乙卯	宗貞茂	太宗	馬	六匹	
13					沙彌靈鑑	太宗	馬	四匹	
14	太宗五	一四〇五	六	丁卯	志佐殿	太宗	馬	二匹	
15			一二		宗貞茂	太宗	馬	一〇匹	
16	太宗六	一四〇六	九	壬午	宗貞茂	太宗	孔雀		爪哇国使陳彦祥の南蛮船から掠取る(『実録』八月丁酉条)。
17	太宗七	一四〇七	一〇	己亥	太宗	宗貞茂	天鵝	一首	使者判札賓寺事李台貴を対馬へ遺す
18	太宗八	一四〇八	四	戊子	宗貞茂	太宗	馬	三匹	

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
	世宗十三			世宗十二	太宗十七	太宗十五	太宗十一	太宗十		太宗八
	一四三一六			一四三〇	一四一七	一四一五	一四一一	一四一〇		一四〇八
			二	一	二	五	二	五	一一	八
庚申	丁巳		庚寅	戊午	壬戌	乙丑	癸丑	癸未	庚申	丙子
世宗	世宗		世宗	世宗	太宗	二溫都老	源義持	日本人	宗貞茂	太宗（金浹）
斯波義淳	使 斯波義淳	斯波義淳	日本國王 （足利義教）		宗貞茂	太宗	太宗	各鎮	平道全	大内徳雄 （盛見）
白鳩 大雄鷄 大狗	白鴨 大狗	大犬 小犬			大犬	馬	象	猿	馬	羊雄雌 鴿鴿
三隻 三隻 三隻	一隻 一隻	一隻 三隻	八隻 一〇隻 二隻 二隻 二隻 二隻 二隻 二隻 二隻 二隻	二隻	不明	一匹	一頭		二匹	二隻 五対
			癩羊は黒い雄羊の意					日本人が連ねて猿を献じたのでそれを分賜した。猿の飼育は司僕寺に命じる		金浹は前書雲觀丞として大内へ報聘

30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
世宗十三	世宗二十五			世宗二十六				世宗二十七	世宗二十八	世宗二十九				世宗三十
一四三一	一四四三			一四四四				一四四五	一四四六	一四四七				一四四八
六	二	一二		五		閏七	八	一	七	三	閏四	五	六	一
庚申	甲寅	壬辰	甲午	丙寅	壬申	己亥	癸酉	辛丑	丁卯	戊寅	丙戌	乙未	丁亥	壬子
世宗	千代熊丸	世宗	世宗	世宗	可沙豆郎、愁弄可	世宗	世宗	世宗	佐藤貞清	世宗	宗貞盛	宗貞盛	日本人	世宗
日本国王 (足利義教)	世宗	宗盛家	宗貞盛	藤九郎	世宗	千代熊丸	源根	藤九郎	世宗	宗貞盛	世宗	世宗	世宗	宗貞盛
白鶴 白鴨雄雌 各色鳩雌雄 白鵝雌雄 銅嘴雄雌 野雞雌雄	馬	鞍馬	鞍馬	天鵝	馬	豁鼻白臉紅沙 騙馬	馬	鞍馬	猿	天鵝	馬	馬	猿(雌)	木鼠(りす) 大犬 羔 白鶴 鴉 白鵝 連錢驄馬
一隻 各三隻 各三隻 各二隻 各一隻 各二隻	二匹		一匹 五隻	一匹	二匹	一匹	一匹			五隻	一匹	二匹	一匹	一匹
世宗十三年五月発未条、庚寅条にて日本国王(足利義教)への礼物について検討する。 銅嘴はハングルではトンチーと読め、カナリヤかツバメ科の鳥を意味する。野雞は野雉のこと 千代熊丸は宗貞盛の子(後の成職)			被虜人口を推刷したことによる特賜。天鵝は食用か?			豁鼻白臉紅沙騙馬(広い鼻をもつ去勢された馬) 源根は向化倭	藤九郎は投化倭護軍 貞清は博多の者 前年、貞盛の家の罹災に対する回賜。食料としてか?	貞盛の使者である井太郎は投化援護軍 使者一行は沙毛多老ら四三名 雄は途中で死亡。雌猿の代価を支払う 宗氏側からの所望。						

62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45
	世祖七	世祖六	世祖五	世祖三	世祖二				端宗一	文宗一	文宗〇					世宗三十一	世宗三十
	一四六一	一四六〇	一四五九	一四五七	一四五六				一四五四	一四五〇	一四五〇					一四四九	一四四八
一〇	四	八	四	一	七	一二	七		二	一〇	一〇	六	九	八	五	四	七
丁亥	壬申	壬申	戊辰	辛巳	戊辰	癸未	己卯		乙未	丁丑	丁丑	辛丑	辛巳	丙寅	丙申	庚午	己丑
大内教弘	世祖	皮古沙文	世祖	世祖	世祖	端宗	端宗	端宗	端宗	文宗	菊池為房	文宗	世宗	宗貞盛	塩津留源聞	宗盛直	世宗
世祖	平茂統	世祖	山名教豊	野人	承傳	若	对馬島主	志佐源義	宗盛直	宗成職	菊地為房	文宗	宗盛家	宗貞盛	世宗	世宗	宗貞盛
雄雌水牛	鞍具馬	馬	雉鳥	馬	彩鳩	天鵝	鞍具馬	天鵝	天鵝	馬	白鴨 鵝兒 栗鼠 狗子	獼猴	鞍馬	白犬 白鶴	猿	猿	馬
二頭		一匹			三雙	五隻	一匹	二隻	五隻	一匹	二匹 二匹 二匹 一雙	二匹	一隻	一隻			一雙
慶尚道熊川で喂育する	茂統は倭人僉知中枢院事		山名教豊が使者を派遣して請求したが回賜したかは不明	一等は鞍具馬、二等は馬	承傳は日本国王使			食用か？	天鵝は食用か？	以下四種を菊池が所望した。同日条に礼曹が菊池は九州の四大勢力の一つで、九州西南の地にあり朝鮮には遠いが慕化し通信してきたので所望に応じるべきであると文宗に提議する	大猿のこと		八月丙寅条の献上品に対しての回賜	代わりに大蔵経、白犬、白鶴を請う		盛直は茂直の子	白鶴は貞盛の所望

79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63
成宗十七	成宗十二	成宗十	成宗八			成宗五	成宗三		成宗一	世祖十三			世祖十三	世祖十		世祖八
一四八六	一四八一	一四七九	一四七七			一四七四	一四七二		一四七〇	一四六七			一四六七	一四六四		一四六二
一〇	一〇	四	一〇	一二	閏六	二	七		九		八	七	三	六	一二	四
丁丑	壬寅	癸卯	乙未	丙申	甲午	甲申	壬子		丙子		丁巳	丙子	庚午	丙申	甲戌	戊寅
成宗	成宗	琉球国	宗貞国	成宗	井可文愁戒	礼曹	成宗	成宗	成宗	日本国	世祖	琉球国王	琉球国王	宗成職	世祖	琉球国王尚徳
宗貞国	宗貞国	成宗	元子	使 日本国王	成宗	三島貞成	宗貞国	少式頼忠	宗貞国	世祖	宗成職	世祖	世祖	世祖	政) 日本国王 (足利義	世祖
馬	馬	猿	天鵝	野鷄雌雄 彩鴨雌雄 白蓬頭鷄雌雄 黒蓬頭鷄雌雄 鴿子雌雄	馬	鴛鴦	馬	縁諸具馬	縁諸具馬	猿子	馬	大鷄 鸚鵡	鸚鵡	馬	白鷄 白鴨	水牛
一匹	二匹		一雙	并一雙 并一雙 并一雙 并一雙 二雙	二匹	一對	一匹	一匹	一匹		一匹			二匹	二雙 二雙	二頭
逃賊徒の補送への礼	同年八月癸亥に所望	当初は受取を拒否する	元子誕生の献上品。『虚白堂集』に詩文あり。		井可文愁戒は倭護軍（『実録』同月癸巳条）					『佔畢斎集』所収の詩文による				明との通交の仲介を朝鮮に求める	世祖、日本国王使順慶に猿を請う	熊川にて留養

88	成宗二十五	一四九四	九	戊子	宗貞国	成宗	馬	一匹	
87			一〇	甲子	大内政弘	成宗	白鵝雌雄	一雙	
86	成宗二十四	一四九三	三	乙亥	宗貞国	成宗	黒毛馬	二匹	
85	成宗二十三	一四九二	三	乙未	宗貞国	成宗	馬	一匹	
84			一〇		成宗	源義材	醜禽之類		『続善隣国宝記』所収。『実録』同年八月戊申条記載の義材の書契には「このほか小珍禽数多」と所望を記す
83	成宗二十二	一四九一	四	辛亥	宗貞国	成宗	京馬	不明	
82			一一	甲午	宗貞国	成宗	青毛馬	一匹	
81	成宗二十一	一四九〇	一	癸亥	宗貞国	成宗	馬	二匹	
80	成宗十八	一四八七	八	丁亥	宗貞国	成宗	青毛馬 栗毛馬	一匹 一匹	

注(1) 表は備考に特に記さない場合は全て『朝鮮王朝実録』を出典とする。(2) 数量は史料の表記に従う。
(3) 銅幣については兼若逸之氏の御教示による。

表から次の点を指摘したい。

a 合計で84件の日朝間の動物授受を確認できる。

b すでに多くの先行研究が、日朝間外交は複数の動線により成立していたと指摘しているが、動物の請来・進献・回賜も、国王だけではなく、朝鮮国王と日本国内の諸勢力との間でも行われた。

c 日本は自国産ではない動物を朝鮮国王へ献上している。

d 日本国王へはつがいの動物が献じられることが多い。

次項では、外交使節である動物の献上・回賜の実態について、『実録』を中心に考察したい。取り上げる動物は、対馬

海峡をわたった動物、つまり、十五世紀前半に特に集中して対馬宗氏から献上が続いた馬、馬の飼育にかかわる猿、南蛮産の動物である象・水牛、様々な種類の鳥類等である。

(一) 馬

対馬島は、すでに十一世紀後半には高麗へ牛馬を献上していたことが文献で確認できる。⁽⁶⁾ 朝鮮王朝の始祖である太祖の即位以来、匹数の多少はあるが対馬の宗氏が継続して馬を朝鮮に献上している。まず、十五世紀の朝鮮の馬政及び、明の対朝鮮馬匹進献要求と、日本からの献馬の関係について考察

したい。

明は冊封の見返りとして高麗及び朝鮮に対して、明の軍事的な国家支配に必要な馬の進献を要求した。⁽⁸⁾そのため朝鮮は、国内に徴馬令を発し、納馬に応じさせるよう様々な強硬手段を講じた。⁽⁹⁾ところが、明への事大の礼を尽す義務と、他方、国内の慢性的な馬匹不足という状況で朝廷は苦慮した。

日本からの馬は、朝鮮の馬不足を解決するような種類の馬でもなく、また頭数でも補えるものではなかった。この時期、献馬を対馬が続けたのは、朝鮮通交の保証を朝鮮側に求める故であり、朝鮮に対する事大の姿勢を示すためだけであろうか。

地理的にも朝鮮に近い対馬島からの馬匹進献は、対馬島全体が朝鮮の「牧場之地」であると自称する、または認識される一因になったと考えられる。

世宗三(一四二一)年に宗都熊丸(後の貞盛)の使者として派遣された「仇里安」と礼曹との問答によると、応永の外寇以来、関係が断絶していた朝鮮に対し、交易復活を望む偽使「時応界都」(又は「辛戒道」)が世宗二年に「本島(対馬島)はもと大国(朝鮮)牧馬の地なり」と対馬は慶尚道に属していると朝鮮側に申し出ていたという。⁽¹⁰⁾「大国の牧馬の地なり」とは、前述のように、古くは十一世紀にまで遡ることのできる対馬からの馬匹進献の事実を踏まえた発言と考えられる。一方、朝鮮は、対馬を済州島と同じく「倭人の活動の本拠地」「夷狄の地」「海上の地」である自国の辺境と考えて

いたといわれる。⁽¹¹⁾一部の対馬島民は、交易促進のために、対

馬島の性格を元代以来の大規模牧場として軍馬の飼育にあたった済州島になぞらえて、朝鮮側に説明していたのであるうか。世宗二六(一四四四)年には、沓岐から帰朝した招撫官姜勘善が「大内殿館伴盧羅加都老言、対馬島本朝鮮牧馬之地」と報告し、さらに文宗元(一四五〇)年八月には、この時の発言と思われる内容を引用している。⁽¹²⁾大内氏も対馬の帰属問題や朝鮮内での対馬認識を理解していたといえるだろう。

成宗二(一四七一)年に撰進した『海東諸国紀』には、「日本国紀」の対馬島の項に「島主の牧馬場は四所にして二千餘匹を可る。馬は多く曲背なり」と記されている。⁽¹⁴⁾『海東諸国紀』には、対馬以外には馬に関する記述は見当たらない。つまり、頭数の多少はあるが、対馬から朝鮮へ献上された馬を対馬の産物と朝鮮側ではみなし、対馬島主所有の牧馬場についても関心をもっていたのである。ただし対馬島主らが献上した馬が朝鮮国内でどのように処遇されたかは不明である。

一方で、朝鮮では馬は献上品としてだけでなく、回賜品としての役割も担っていた。『実録』世宗十六年三月甲申条では宗貞盛が馬を請求した際に、撫柔策として、馬一頭を「前例に従い」貞盛に回賜すべきであるという意見と、倭の要求は限りないので、請求を断るべきであるとする意見にわかれ、結局世宗は後者の意見を採用した。この史料から、十五世紀には回賜品として対馬からの使者や朝鮮に与した倭人に馬が与えられた先例があったことがわかる。つまり、朝鮮は

明に倣い、明が「馬」を「蛮族」に褒賞として下賜するように、または、明が朝鮮の官人に与えた賞賜に倣ったように、「対馬」に「馬」(多くの場合「鞍具」を付けた馬)を与えていたのである。対馬―朝鮮間の馬の授受は、朝鮮は、明に倣った外交姿勢でもって対馬に接し、対馬もまたそれを甘受したことを意味する。

朝鮮国内の馬政は、当初、兵曹と司僕寺が担当していた。しかし、後には、動物の飼育に関わる司僕寺の専担となり、司僕寺は国家馬政管掌機関として、更には国王専属馬政機関として馬政に携わるようになる。⁽¹⁶⁾『乙巳経国大典』が編纂されるまでに、幾度かの変更を加えつつ馬政の職掌が定められた。このような状況にあった朝鮮の馬の飼育のために欠かさない動物が、日本から輸出された猿である。

(二) 猿⁽¹⁷⁾

ところで、猿は馬の飼育にどのような効果があったのであろうか。

石田英一郎氏は『河童駒引考』⁽¹⁸⁾で、インド・中国など広い地域において、猿を馬の守護動物とする観念を共有していたと指摘している。⁽¹⁹⁾朝鮮もこの観念に従い日本に猿を求めたということは、先行研究においてすでに明らかになっている。

日本からの猿が『実録』に記録されたのは、太祖三(一三九四)年七月庚戌条である。この猿は、朝鮮僧梵明が日本から持ち帰ったもので、飼育は動物の飼育に携わる官衙である

司僕寺に命じられた。更に、太宗十(一四一〇)年には日本人が連なつて猿を献上してきたので、それを分賜した。この時も司僕寺は飼育を命じられている。⁽²⁰⁾世宗二十八(一四四六)年七月丁卯には佐藤貞清が猿を献じている。翌年六月には、司僕提調⁽²¹⁾の金宗瑞や元通信使副使として日本事情に明るい尹仁甫が世子(皇太子、のちの文宗)へ馬に対する猿の効用を説いた。その際、二人は、この年につがいの猿を献上しようとした倭人に対し、朝鮮に入ってから雌猿が死んでしまったことを理由に礼曹が雄の猿の代価のみを与えた対処を批判した。結果、尹仁甫を倭人のもとに遣わし、朝鮮が猿を所望する旨を伝えることになった。⁽²²⁾

世宗三十一(一四四九)年には五月に壱岐の塩津留聞が、八月には宗貞盛が猿を献上した。貞盛は、献上の回賜品として「大藏経・白犬・白鶴」を特に請求した。翌月、貞盛には希望どおりの回賜品が与えられた。文宗即位(一四五〇)年十月には菊地為房が獼猴^(びこう)(大猿)二匹を献上している。

世祖八(一四六二)年十二月には、日本国王使として来朝した僧順慶に対し、「獼猴は馬に宜し、本国に産せず、⁽²³⁾」という理由を述べて猿を請求している。その後、『実録』では十五世紀に猿を進献したとは確認できないが、米谷均氏により紹介された金宗直の詩文集『佔畢齋集』には「猿子⁽²⁴⁾」成化三年日本人来献の題で日本人が献上した猿を詠んだ詩があるので、成化三(一四六七)年にも献上があったのであろう。

ちなみに、猿の進献は日本からだけではなかった。明皇帝

成祖の使者黄巖の従者である韓帖木兒は太宗八（一四〇八）年に雄二匹、雌一匹の計三匹を献上した。⁽²⁵⁾ 明が猿を贈った理由は不明であるが、馬匹進献を要求する明から送られた事實は興味深い。前述のように、朝鮮は明からの大量の馬匹進献要求に応え、更に、同時に国内用馬匹の確保の必要にも迫られていたからである。なお、成宗十（一四七九）年の琉球国からの猿の進献に対しては、理由は不明だが、朝鮮では一度断わった後で受け取っている。⁽²⁶⁾

日本からの猿が果たした、朝鮮での馬の飼育における具体的な役割は不明である。しかし、日本からの「猿の進献」を通じて、間接的とはいえ日本を巻き込んだ形で明の対朝鮮馬匹進献要求は進められたとも言えるだろう。

（三）水牛

朝鮮の馬政の対象、つまり明より進献要求のあった動物は、馬、そして「牛・羊」である。一方で、朝鮮が明へ請求した動物は「水牛」である。水牛は、朝鮮や日本に成育していた牛とは異なる。以下の記事は、朝鮮における水牛の役割、水牛に対する認識を示している。

『実録』世宗十四（一四三二）年二月壬寅条

上又曰、水牛力壮、可使耕田、予欲奏請易換、但本国與中朝南方風氣不同、恐或不盛、商曰、臣聞、水牛耕田倍、於常牛全羅道風氣與南方相似、可以畜養、稠亦言其利、上曰、高麗奏請欲換驢、帝還其價、賜驢三十匹、仍

勅曰、予欲頒賜中外、但畜養之數少、而未果令請水牛無害於義、可咨礼部請換、礼部不許具辭奏達如何僉曰可、

『実録』同年五月癸酉条

曾有上教云、船匠及水牛、將奏請上国、今謝恩之行、奏請否、上曰、（中略）若水牛、則或以為珍禽奇獸、不當奏請、然此物不是奇獸、耕田服車、所繫甚重、（後略）牛と異なり、水牛は朝鮮国産の動物ではなく、むしろ明へ請求した動物である。朝鮮では、南方の氣候によく似た全羅道でのみ飼育可能であった。

世宗は水牛を「力壮」で、「耕田に役立ち」「車を引く」動物とみなし、その繁殖に興味をもったようである。そこで、易換を明へ申し出たのであろう。また、史料を読む限り、明への水牛請求に際し、水牛が「珍禽奇獸」ではないということとは、朝鮮側にとっては重要な意味を持っていたことが窺える。

世祖七（一四六一）年十月には、大内教弘が朝鮮から求められていた水牛雌雄二頭を献上するために遣わした使僧能縣が慶尚道熊川に到着した。そこで、上護軍趙得琳が熊川へ行き⁽²⁷⁾ 喂養し、春を待ち押来させることになった。琉球もまた水牛を朝鮮に献上していた。

『実録』世祖八（一四六二）年四月戊寅条に

琉球国所進水牛二頭、留養熊川、至是、遣司僕寺尹朴徐昌取来、牛性畏暑、深伏水中、命養于昌德宮後苑、令司僕官員輪次看養、又命抄録医經、及諸書養牛法、使医生

四人習之、

と、朝鮮では琉球からの水牛の飼育に医生まで登用し取り組んでいたことが記されている。

同年二月には、琉球に漂到した船軍梁成・省得誠らが琉球事情を報告し、畜育している獣として「牛馬猪鶏犬」をあげているが、その際に水牛を朝鮮側が所望したのであるうか。

大内政弘は、「尊命を承り」大内教弘が水牛をつがいで献じたこと、又、本人も先祖同様に朝鮮との旧好を維持したい旨を成宗五（一四七四）年七月に書契にて伝えた。²⁹ 政弘は、その後も世祖七年の水牛進献を大内氏の通交理由の根拠のように朝鮮側に伝えた。

『実録』成宗六年六月辛巳条

（中略）世祖每欲遣使通信、慮海路險遠未果、適大内殿使来献水牛、因言曰、我国敬事大国、大国何一不通信乎、
『実録』成宗十年四月丁未条

（中略）一、大内殿前此通信中朝、請得水牛雌雄并四首、去辛巳歲、將雌雄二首来献貴国、只留二首、孳息不敷、因此絶種、我等離本土到壹岐州、那衍聞貴国水牛蕃息、使人来諭曰、前往請得、若蒙允許、来歲当粧船出送、貴曹如不信此言、則当以本国通書為質、仍出示之、乃其執事人求水牛書也、

さらに、政弘が成宗十六（一四八五）年に礼曹に充てた書によると、天順四（一四六〇）年に朝鮮からの水牛進献の命に従ったとある。³⁰ しかし、世祖七年以降も大内氏が水牛を進

献していたことを確認することはできない。

ただし、朝鮮では日本における牛馬事情について関心を寄せていた。日本通信使一行であった李仁畦は成宗に、九州では、耕田は馬がおこない、牛は山谷に放牛されていると説明した。更に、水牛は日本産ではなく、南蛮との貿易によって入手していると説明した。³¹ 日本でも、大内氏には朝鮮の水牛飼育事情が伝わっていたことは史料から明らかである。馬と異なり、水牛は牡牝のつがいで献上されている。これも、朝鮮における水牛の繁殖事情、必要性を日本側でも認識していた頭れであると思われる。

出自を朝鮮に求め、その縁を強調することで日本国王、対馬宗氏とならび一大勢力となつて朝鮮に遣使を続けた大内氏の献上品の一つが水牛であった。日本の諸勢力から朝鮮国王への献上品の多くが美術工芸品や南蛮經由の胡椒などのモノであった中で、動物を献上したことは注目に値する。

大内氏から朝鮮への水牛進献は、明もしくは南蛮經由の水牛の進献であった。つまり、十五世紀後半には、朝鮮と日本の一勢力との交易は、南蛮などの第三国の存在抜きには成立しなかったのである。

（四）象

十五世紀に対馬海峡を渡った動物の中で最大の形状は、太宗十一（一四一一）年に足利義持が太宗に献上した象である。

室町時代になるまで日本に生きた象が到来したことはない。しかしながら象の形状は、すでに仏画や彫刻の形で日本には伝来し、『鳥獣人物戯画』に描かれた象や涅槃図を通じて広く日本人には「象」が仏教に関係の深い動物として認知されていた。

これらの象は仏画的であり写実性に欠けるといわれるが、それは画家の創意による造形というよりは、彼らの間で受け継がれたすでにパターン化したポピュラーな図様に引きずられるところが大きいからである。⁽³²⁾しかし、それは現在私達が目にする象の姿とまったく異なるというわけではない。ちなみに、実物の象の写生は狩野内膳が十六世紀末から十七世紀初頭に描いたといわれる南蛮屏風の黒人と象が日本初である。⁽³³⁾

日本人で実物の象について初めて記録を残したのは入宋僧成尋である。熙寧五（一〇七二）年に南京へ上陸した成尋一行は、象舎を見学する機会に恵まれ詳細な記録を残した。⁽³⁴⁾また、建保五（一二二七）年頃に入宋経験をもつ慶政上人の『漂到琉球国記』には、寛元元（一二四三）年九月十七日条に琉球国東南方の水辺で象頭骨を見た⁽³⁵⁾と記されている。

次に史料上で確認できる象は、応永十五（一四〇八）年に若狭国小浜沖に漂着した南蛮船に船載されていたと伝えられる黒象である。これが日本へ初めて上陸した「生きた象」であった。

南蛮船の日本への来航は南蛮と朝鮮との交易と関係がある。

室町時代になってから、数回にわたり南蛮諸地域は朝鮮へ使者を送っているが、途中で倭寇に襲われることがしばしばあった。とりわけ、太宗六（一四〇六）年に爪哇国使節陳彦祥⁽³⁶⁾が入朝した際には、全羅道群山島に到る途中で倭寇に襲われ、船中の物品を強奪されただけではなく、一行のうち六十人が俘虜となり、二十一名が戦死、四十人は辛くも死を免れて朝鮮半島に上陸した。船載の荷は、宗貞盛が南蛮船から掠め取ったと朝鮮への献上の際に自ら申告した。朝鮮では検討の結果、胡椒や孔雀などを受け入れた。陳彦祥は太宗より新しい小船一隻を得て、朝鮮を發ち帰国する際に翌年の来朝を約束した。同時期に旧港（バレンバン）の華僑が日本との交易を展開しようとして船を出した。⁽³⁷⁾

応永十五（一四〇八）年六月に若狭国小浜に南蛮船が漂着した。この船が、『若狭国在所今富名領主代々次第』⁽³⁸⁾（以下『代々次第』と略す）に記された南蛮船である。⁽³⁹⁾この史料から、「生象一疋^黒、山馬一雙、孔雀二対、鸚鵡二対、其他色々」の船載を確認できる。『代々次第』『武家年代記』⁽⁴⁰⁾では、船を派遣した亜烈進卿は日本国王へ船載品を進献したとし、『東寺王代記』⁽⁴¹⁾には、応永十五年七月二十二日条に「黒鳥自唐引進、高六尺余」と、象らしき動物が入京したと思わせる記事を載せている。しかし、実際に足利義持が象を見たという記録、象の評判といった記録を他で確認することはできない。あれだけ大きな動物が都へ上がれば、様々な記録（道中記）が作成されてもよいのではないか。

ところで、現在の小浜市には象の京上の可能性を示す資料もまた遺されている

小浜市の福井県立若狭歴史民俗資料館では小浜市上根来集落の氏神である広嶺神社から発見された懸仏を展示している。四面に銘が残り、その一つに「願主 本阿」「応永廿一年五月七日」と銘が記されている。この本阿が応永十五年及び応永十九（一四一三）年六月二日に再度小浜に到着した南蛮船を請け負った問丸の本阿（本阿弥）と同一人物とは言い切れない。しかし資料館の展示解説によると小浜の津から若狭彦神社の神前、神宮寺を過ぎて、広嶺神社のある上根来・針畑峠（根来坂）を超えると滋賀県高島郡朽木村小入集落へでる。ここから琵琶湖岸や北山山系を経て奈良や京都へ至る「旧鯖街道」であるので、この本阿と京都のつながりをうかがうことができるという。さらに、神宮寺の本堂内の角木には四五〇年前に彫られたという「象」と「獏」の彫り物がある。⁽⁴²⁾象について具体的な記録がない中、普賢菩薩の乗り物として、又、涅槃図に描かれる仏教と関係の深い動物であるとはいえ、小浜の寺社に象の彫り物が残されていることは注目に値する。小浜へ象が上陸した資料といってよいと思われる。

この象は、その後、日本からは姿を消し、朝鮮へ日本国王からの進献物となったことが、『実録』からうかがえる。

珍（稀）獣である象をどうして日本国王は朝鮮国王に進献したのであろうか。その答えは朝鮮での象の飼育状況に顕れ

ているように思われる。

『実録』太宗十一（一四一一）年二月癸丑条

日本国王源義持、遣使献象、象我国未曾有也、命司僕養之、日費豆四、五斗

『実録』太宗十二（一四一二）年十二月辛酉条

前工曹典書李瑀死、初日本国王、遣使献馴象、命蓄于三軍府、瑀以奇獸往見之、哂其形醜而唾之、象怒踏殺之、日本国内の足取りも朝鮮に送られた経緯も不明ではあるが、ともかくも、この象は、太宗の命令により司僕寺に世話を一任された。一日あたりの食料は豆四、五斗と定められた。よく馴れた象であったと『実録』にはあるが、その後、思いがけない事故が生じる。

象を視察した前工曹典書李瑀は、象の形相の醜惡さに驚き唾を吐きかけてしまい、象に踏み殺された。唾を吐きかけたので踏まれたのではなく、象の足元にいたが故の事故であったと考えられる。人を踏み潰す動物は朝鮮半島には恐らく存在していなかったであろうから恐怖を感じただろう。

『実録』太宗十三（一四一三）年十一月辛巳条

命置象于全羅道海島、兵曹判書柳廷顕進言曰、日本国所献驯象、既非上之所玩、亦無益於国、触害二人、若以法論則殺人者、当殺、又一年所供藟豆、幾至数百石、請倣驅犀象之、象置于全羅海島、上笑而從之、

柳廷顕は、「太宗が象を愛でることをやめてしまっただけではなく、二人に害を与え、人間の法に当てはまるとすれば殺

人者と何ら変わらないので殺してしまえばいいのではないだろうか、又一年間に餌となった菊豆は数百石となった」と、益がないことを強調し、象を始末することになった。とはいえ、日本国王からの贈呈による象である。殺すわけにもいかず、全羅道の海島（順天府獐島）に流すことにした。

『実録』太宗十四年五月乙亥条

命出馴象于陸地、全羅道觀察使報、馴象放于順天府獐島、不食水草、日漸瘦瘠、見人則墮淚、上聞而憐之、故命出于陸、參養如初、

半年が過ぎ、役人より、この象は、餌になると考えられていた水草を食せず、痩せていく一方で見える者の涙を誘うばかりであったとの報告があった。そこで太宗は、哀れを感じて島から半島に戻すよう命じた。しかし、その後、この象がどうなったのかは不明である。

日本国王が象を手元に置かなかったのは、朝鮮へ送られるまでの間に「象は得体の知れない生き物である」ということがわかったからではないだろうか。また、陳彦祥の孫男が太宗十二（一四一二）年四月に朝鮮へ来朝したときに説明したように、本当は日本ではなく朝鮮に向かって航海をしていたのであるならば、この象は日本国王ではなく朝鮮国王へ贈られる可能性もあった。父義満とは異なり、外交に対して消極的であったと評される足利義持にとっては、偶然とはいえ巨大な動物が贈られたことに迷惑し、本来の持主へ送りこの件から解放されたかったのかもしれない。

（五）鳥類

表では、様々な鳥類の名を見出すことができる。その中で、日本や琉球から朝鮮へ進献された南蛮経由の鳥類として「孔雀」「鸚鵡」を、挙げるができる。

「孔雀」は「象」の項でも紹介したが、宗貞盛が太宗六（一四〇六）年八月に陳彦祥の南蛮船から掠奪し進献した物品である。そのことを知った司僕院は「珍禽奇獸は国で育わ^やないことは古からの訓である」と申し入れたが、太宗は囿（垣を巡らして鳥や獸を飼うところ）を管理する上林園で孔雀を飼うよう命じている。

「鸚鵡」は琉球から進献された。琉球に漂到した船軍梁成の琉球内での禽獸の飼育についての報告によると、鸚鵡は琉球で玩好されていた様子であるが、「常於中原買來」、つまり琉球の鸚鵡は中国産（南蛮産）であった。その後、世祖十三（一四六七）年三月には琉球国王から、更に七月には同照、車渾と琉球国王の遣わした僧から鸚鵡が献上されている。前述の『佔畢齊集』にはこの時の鸚鵡の詩も含まれている。ちなみに鸚鵡の小さいものとして知られていた鸚哥^{インゴ}を世祖十三年に日本国王足利義教が世宗に所望している。「上曰国王所求之物何以答之、僉曰、非本国所産金欄・竜眼・荔枝・鸚哥外、鶴与白鳧、宜給之」と、重臣らは僉議の結果、本国産でない動植物の他に、鶴など朝鮮産の動物を返礼として贈るよう世宗に提案している。しかし、世宗は日本国王の所求する品目が多すぎると判断し、結果として表に記載した朝鮮産の鳥類

を礼物とした。⁴⁸南蛮産の動植物は希少性ゆえに日本朝鮮を問わず珍重されていたが、両国の珍禽奇獸に対する考えは異なっていた。この件については後述する。

日本から朝鮮へ進献され詩文に詠まれた鳥は天鵝である。

成宗八(一四七七)年十月に宗貞国が、成宗の元子(第一皇子)誕生を祝す目的で、「天鵝(白鳥)」を献上した。この鳥を鶴と聞いていた領事尹子雲がその不実を糾そうとしたところ、貞国の使人が、「天鵝は、屑塵土中にはいない。雲間を飛ぶので長寿を意味し、また元子を象徴するために献上した」と、天鵝が瑞鳥であると説明をしている。⁴⁹天鵝は成宗の兄である月山大君に下賜され、国王が月山大君邸で見学した際の詩文が成俱の『虚白堂集』に収められている。⁵⁰

日本国進天鵝一雙上又留宮即賜月山大君 上幸其第鵝聞
楽翔舞

来自扶桑万里遥、東平園裏擅高標、毳毼玉羽当翎押、皎
皦霜毛驪頂飄、騰舞池辺依棣萼、翱翔波上聽簫韶、乾心

不宝珍奇物、敢作歌謡讚聖朝、(傍線は筆者による)

(遙か遠くの日本からやってきて、東平園の裏庭の高い枝をほしいままにしている。玉のような羽であるなあ。その白く清らかなさまは霜のようだ。この二羽の池のあたりを舞う姿は仲の良い兄弟のようである。波の上を空高く飛ぶ音は、簫韶(音楽の名)を聴いているようだ。天子の御心は、珍奇なものを宝とは思わないが、敢えて詩をつくり、今の御世を称えたい)

この詩文には、成宗が珍奇なものを愛でないという性格が詠われている。それでもなお、詩人を感動させるほどの美しさであったことが詩を通して伝わってくる。

朝鮮から日本に來た鳩は朝鮮鳩といわれ、「頭背灰黒色腹灰白、鷹の彪のあるものを朝鮮鳩と名づく」と『和漢三才図会』に記されている。白鳩は数珠を頸に掛けているように見えるのでズズカケバト(数珠掛鳩)とも呼ばれていたシラコハト(白子鳩)のことを指すのではないだろうか。

雉は、日本でも古くから愛好されていたが、とりわけ、白雉は中国の故事はもちろんのこと、日本でも瑞祥の象徴であった。中国や朝鮮の高麗雉は、雉に似ているが、体はやや大きく、雄の頸には白い環紋があるのが特徴である。⁵¹

その他の鳥類として、前掲表より「鴛鴦」、「鵝(鵞)鳥」、「鴨」、「鶴」、「鵲」の名を挙げるができる。これらの鳥類は、朝鮮に生息した。日本へは白色の種類が回賜品として届けられ、特に、日本国王使には必ず雄雌のつがいで送られた。友好の象徴であろうか。

日本へは珍禽の進献・回賜をすることを快く思わなかった朝鮮であるが、明へ瑞祥の象徴である鵲や鷹を献上していた。しかし、憲宗帝の代から「花木鳥獸の進貢は許していない」と咎められてしまう。

『実録』世宗十三年三月乙亥条

王朝使趙瑾、菅押使押使朴璘賚勅復命、勅曰、去年十月王遣金永濡進白鵲一隻、十二月遣趙瑾海青二連、又遣崔

敬礼進青海一連、三閱月之間、三次進貢、王之勤誠、固為可見、然朕即位之初、已詔各所、不許進貢花木鳥獸、況白鵲瑞異之物、海青羽獵之用、朕以稽古罔治為用、得賢安民為瑞、於瑞物羽獵、澹然無所好焉、今於王所獻、置諸閑所而已、勞王誠懇、良非敬上之所、宜今後勿復爾也、只宜遵守常礼進貢、(傍線は筆者による)

白鵲と鷹(『実録』では青海又は海青と記される)、特に鷹は明帝の要請により連年進獻してきた鳥類である。朝鮮は明への金銀の歳貢に苦しみ、その免除奏請のために鷹を進獻したのである。朝鮮国内では、鷹は民衆の上納公課の一つであった。⁵⁴⁾

しかし、憲宗代には進貢物に花木鳥獸を含めることが許されず、世祖十二年十月以来、三ヶ月の間に三度にわたり憲宗帝に対し瑞祥の徴である白鵲などを献上した世祖に対し、「只宜遵守常礼進貢」と勅が伝えられたのである。この、朝鮮や明の進獻(貢)物に対する考え方については、次章で検討したい。

(六) その他の動物

その他、朝鮮から日本へ送られた動物について概観する。日本から朝鮮に回賜を希望した動物として、犬(狗子)を挙げることができる。犬のうち蜀狗(狗)は狎のことといわれている。日本では室町時代以降狎を愛玩するようになったといわれているので、これらの犬も狎を指している可能性があ

る。白犬や白犬犬を所望しているのは、日本にはない品種であるためと考えられるが、日本でどのように飼育されていたかは不明である。

以上、本章では、日朝間における動物の献上・回賜についてまとめてみた。両国とも動物の授受の基準は「珍禽奇獸」である。それは日本では受容の理由として積極的な意味をもったが、朝鮮ではむしろ消極的な意味をもち、場合によっては拒絶の理由にもなった。

次章では、「珍禽奇獸」が東アジアでどのような意味をもったか、日朝の事情より考察することで、日本と朝鮮の動物授受に対する認識の差について検討したい。

二、日朝の動物授受に対する認識

(一) 「珍禽奇獸不育於国」

従来、日本では、国内で入手困難である動物を海外に請求した。十五世紀には、入手した動物を更に第三国である朝鮮へ進獻さえしていた。

ところが、朝鮮は多くの場合、国益となる実用性のある動物を請求した。前章で引用した史料に幾度となくそのことは記されている。

もつとも、朝鮮は琉球には鸚鵡を請求している、という矛盾もある。珍奇なものに関心を寄せるというのは、人間として自然なことであり、その好奇心を自制できなかったのであ

ろうか。

ところで、朝鮮のみならず、憲宗帝の詔にもあるように中国でも「珍禽奇獸」を避ける傾向があった。両国の為政者の「珍禽奇獸」に対する共通の態度は、実はある書物によって代々形成されていったのである。

その書物とは『書經』である。そこに収められた「旅獒」の条に「異物を貴んで用物を賤しまざれば、民乃ち足る。犬馬其の土性に非ざれば畜^{やしな}はず。珍禽奇獸、國に育^{やしな}はず。遠物を寶とせざれば、則ち遠人格^{いた}る」と、四夷が貢物を献上した状況における玩物喪志の戒めを説く篇がある。⁽⁵⁶⁾ 朝鮮もそれに倣い、日本が自国産でない動物を献上する都度、慎重にしていたのである。つまり、実行するかどうかは別にして、中国・朝鮮では「用物を異物より貴べば王位は安定する」とする帝王学が一貫して伝承されていた。日本では災厄理由を珍獸に求めたり、「旅獒」を引用して外国産の動物の流入を危惧する者もいた⁽⁵⁷⁾一方で、12世紀以降、国家間外交が途絶えて以降も、為政者が率先して非公式な外交ルートを温存して珍奇なものを入手しようとした。

このような、政治思想の差違から日朝間の進貢・回賜に対する考え方の違いが明確になるのは、朝鮮で儒教が政治思想の根本となった十五世紀であるといえよう。

とりわけ、成宗は經書を重要視した。成宗が前経歴李仁睦に「倭亦知学乎」と尋ねたところ、「但解題詠耳、經書則不学也」と答えている。士大夫階層と同等の教養を備え、中世

日本の外交ブレイクの座を占めていたはずの僧についても「寺僧好詩、求詩於申叔舟、即賦三十篇、僧見之心服欲和而未能也」と日本僧の漢詩文への関心の高さにについてのみ述べている。⁽⁵⁸⁾ 先学が既に論じているように、東アジア文化圏として「漢詩文」を詠むという共通の文化は外交の場での意思疎通の有効な手段となったことは言うまでもない。しかし、実際の進獻・回賜行為においては、「作詩」よりも「共通の教養」ともいうべき「經書」の（特に動物に関して言えば『書經』『旅獒』）理解が必要であった。

日本からの朝鮮への通行者、特に日本国王は、朝鮮側が度々評していたように、大藏經やその他の物品への関心がより高く、「礼」のもとに形成された明朝関係と共通する関係を十五世紀には日本と朝鮮とは築くことはできなかったのである。⁽⁵⁹⁾

(二)「禽獸」に対する日本側の認識の変化

冒頭で述べたとおり、日本は回賜品として、大藏經や仏具、さらには貨幣などを請求した。それらに比べると、動物は価値が低く、必要なものではなかった。そのため、日本国王側からも、回賜品として所望する物品の中に動物を含めないよう指示をだすようになる。それが、内閣文庫に所蔵されている『高麗國よりまいるへき物御用捨條々』⁽⁶⁰⁾である。

別幅事、先々も不定候之間、為御心得、両通写進之候、以前遣候十六種かきのせ候、別幅之内、加増之分をは志るしわけ候、無御用物にハ合点候、くら耄くち、かうろ

式、あか、祢のほん式、筆百、山鳩雌雄並式つかい、此五色ハ御無用候、

一、(略)

一、(略)

一、禽獸之類之事、船中にて被飼候はんするを煩敷候歟、又は御用にもなく候、不可有御渡候、

一、草花事、めつら志き物候ハ、根にても又ハ實にても候へ、種を可被渡候、本朝にある物ハ無御用候、

一、(略)

右條々口状にては以後可相違之儀候之間、心得られやすき様に、以和字大概註進之候也、

文明十三年五月日

文明十三(一四八一)年に足利義政は、大和円成寺のために大藏経を請来し朝鮮に国王船を派遣し先のような注文を出した。これに応じた、当時の朝鮮国王李瑱(成宗)の大藏経の贈給を報じた返書には動物が含まれていない。

古代以来、日本と朝鮮半島の間では「もの」の往復があった。新川登亀夫氏は、その特徴として、朝鮮半島から日本へ贈られた「もの」には広範囲な交易物が多く含まれていたと指摘されている。朝鮮は中国からうけた心的効果を交易という名に転化し、日本はそれを受け入れた。

その当時、日本には、朝鮮または中国からうけた心的効果を更に向ける地域がなかった。むしろ、日本では「唐物使」が官職の一つであり、僧侶が目利きとして重用されたように、

異域の物産に対し好奇心こそあれ警戒心は少なかったのである。「唐物」への憧憬は一般に強く、唐物は権力者の象徴でもあった。十五世紀に入り、日本が琉球を経由して南蛮物産が入手できるようになると、それを朝鮮に進献している。これは古代以来、朝鮮が日本に対して、交易で得た影響を伝播したように、日本もまた、朝鮮に対して同様の影響を与えたといえよう。

義政は、往来の船での動物の飼育が煩雑であるという理由から動物を請来しないことを文明十三年に決定した。これは、あくまでも義政個人にとって動物は「めつら志き物」でも大藏経に代わる国内諸勢力に対する權威の象徴でもなく「御用にもな」かったからであろう。であるから、十年後には、足利義材は朝鮮へ小珍禽を所望し、成宗はそれに応えている。つまり受け手個人の嗜好によって、禽獸の授受の状況は変わっていくのであると考えたい。

終わりに

本稿では、動物の進献・回賜の實際を考察した。その結果として、十五世紀の東アジア社会では「経書」の教えが帝王学の基盤であったのに対し、日本では、政治思想、そして対外認識の基盤にこの教えが取り入れられていなかったことを指摘したい。この差異は、動物に対する朝鮮の実用性の重視、日本の稀覯性の追求につながった。もちろん、朝鮮が琉球の

鸚鵡を愛玩したなど、奇禽に対して一部矛盾していると思われるところもある。しかし、それは十五世紀になって成立した琉球王国そのものが、朝鮮にとっては未知の国であり、無条件の受容が必要であったのだろう。

そして、日本が献上した「実用的」動物は朝鮮の内政のみに有効であったのではなく、間接的には明・朝関係にも影響を与えていた可能性があることも指摘しておきたい。そこには、「日本国王」の姿はなく、自らの帰属性を朝鮮にも求めた対馬の宗氏及び西国大名として外交への参画を図っていた大内氏が携わっていたのである。すでに先学が論じているように、日朝間には様々な形態の通行者が存在した。十五世紀の動物授受は、日朝間でのみ考察すべき問題ではなく、明・南蛮をも含めた海域アジアにおける交易としてとらえていく必要があると結論付けて筆を擱きたい。

註

- (1) ここでいう「日本」とは、当時外交権を保有している東アジア世界で認識されていた「日本国王」こと足利将軍及び偽使を含むあらゆる朝鮮への通行者を指す。
- (2) この時代の「南蛮」は十六世紀にポルトガルやスペインを指した「南蛮」とは異なる。田中健夫氏が指摘されるように、特定の国、地域を指すのではなく極めて漠然と中国・朝鮮以外の外国という意味で当時の日本人は用いていたのである。(田中健夫「南蛮船と黒船」『日本歴

史』六二号、一九五三年)

- (3) とりわけ、朝鮮時代前期には日本(及び琉球)から齎されたの胡椒は薬用もしくは一部の人士たちの嗜好品としての需要が高かった。(平木實「朝鮮時代前期における胡椒交易をめぐる」『朝鮮学報』第一五三輯、一九九四年十月)

- (4) 動物が外交に及ぼした影響については、渡辺守雄他『動物園というメディア』(青弓社、二〇〇〇年)を参考にした。

- (5) 渡辺守雄「メディアとしての動物園」(註4) 四一頁。

- (6) 『高麗史』宣宗四(寛治元・一〇八七)年、七月十二日条。なお、平安時代末までの日本での動物の出入については、田島公「日本、中国・朝鮮対外交流史年表」(奈良文化財檀原考古学研究所附属博物館編集『貿易陶磁』臨川書店、一九九三年)を参考にした。

- (7) 朝鮮における馬政とは馬匹(馬、水牛、羊)に関する政治を指す(有井智徳「朝鮮初期馬政研究」二十頁。『朝鮮学報』一五九号、一九九六年四月)。

- (8) 明と高麗・朝鮮との間における馬匹進献問題については、北島万次「明の朝鮮冊封と交易関係」(『中世史講座』第一一卷、学生社、一九九六年)に拠る。

- (9) 例えば『実録』太宗十年二月丁巳条。

- (10) 村井章介『中世倭人伝』(岩波書店、一九九三年) 六五―七三頁。仇里安は、礼曹に対し、対馬は日本に属す

ると主張し、朝鮮もその主張を受け入れた。

(11) 註9に同じ。

(12) 『実録』世宗二六年一月辛未条。

(13) 『実録』文宗元年八月己丑条。

(14) 申叔舟『海東諸国紀』(田中健夫訳註、岩波文庫、一九九一年)一九五頁。

(15) 北島万次前掲論文には、『実録』太宗九年四月甲申条等の記事に基づき、永楽帝期の処女進献要求に答え永楽帝に五人の進献処女を押送した権永均ら四名に対し、明の官職と賞賜を与えたことが紹介されている。その賞賜の一つが馬(有差があり匹数は異なる)である。

(16) 有井氏前掲論文十九頁。

(17) この項は、田中健夫「猿の輸出」(『日本歴史』四五二号、一九八六年初出、『東アジア通行圏と国際認識』吉川弘文館、一九九七年に再録)高橋公明「日本猿、朝鮮へ行く」(『年報中世史』九、一九八六年)に拠るところが多い。

(18) 石田英一郎「猿と水神」(『新版河童駒引考—比較民俗学的研究—』所収。岩波書店、一九九四年)

(19) 文化人類学の立場からの見解を紹介しておく。大貫恵美子氏は『日本文化と猿』(平凡社、一九九五年)五九—六一頁で、馬を野生の仲介役、猿を文化の仲介役と考え、「馬の無病息災を祈祷する巫女の役回りを受け持っていたのではないか」との考察を示されている。また、馬と

猿との間の象徴的共通点として、「神々を天界から地上のヒトの社会へと運ぶ」ことを示唆されていることも興味深い。

(20) 『実録』太宗十年五月癸未条。

(21) 韓祐勅『韓国通史』(平木實訳、学生社、一九七六年)二五九頁に「提調は各司または各庁の官制上長官でない人にその責任を任せた職務のこと。高級官吏が兼職をするための職名」と解説があるのでこれに従う。

(22) 『実録』世宗二十九年六月丁亥条。

(23) 『実録』世祖八年十二月甲戌条。

(24) 米谷均「—史料紹介—東大史料編纂所架蔵『日本関係朝鮮史料』」(『古文書研究』四十八号、一九九八年十月)。

米谷氏が指摘されるように、これまでの先行研究では、成化三年の猿については、まったく触れられていない。

(25) 『実録』太宗八年四月丙申条。

(26) 田中健夫氏は前掲論文で、この記事から朝鮮人すべてが猿を受け入れていたわけではないと指摘された。

(27) 『実録』世祖七年十月丁亥条。

(28) 『実録』世祖八年二月辛巳条。

(29) 『実録』成宗五年七月庚辰条。

(30) 『実録』世宗十六年十月甲申条。なお天順四年の水牛進献は、辛巳年の水牛進献を意味すると思われる。

(31) 『実録』成宗十年二月丁丑条。

(32) 「鳥獣人物戯画」解説(『日本絵巻大成』六、中央公論

社、一九七七年)

(33) 藤田緑「日本史における「黒坊」の登場—アフリカ往来事始—」(『比較文学研究』五一、東大比較文学会、一九八七年)

(34) 『参天台五台山記』熙寧五年十月七日条。ここには「象の高さ一丈二尺ばかり。長さ一丈六尺ばかり。鼻の長さ六尺ばかり、牙の長さ七尺、曲がりて上を向き、鼻を以て鼻を巻き取りてこれを食べふ。(中略)。皆黒象なり。(中略)象は元広南大王、戦ひの為に城に於て養ふ所なり。広南を破りて後、此に於てこれを養ふ云々。象に毛無なし。膚の色、日本の黒牛の如し。」と象を説明している。(なお、読み下しは伊井春樹『成尋の入宋とその生涯』吉川弘文館、一九九六年、一五五—一五八頁に拠る。)

(35) 下郡剛「『漂到琉球国記』成立の背景—作者慶政と松尾社—」(『立正史学』第八六号、一九九九年)。同論文で、翻刻のうち恵良宏氏「漂到琉球国記について」(『南島研究』第四号、一九六六年)では、「馬頭骨」と判読するが、図書寮叢刊「伏見宮家九条家旧蔵所縁起集」、山里純一「漂到琉球国記について」(『古代日本と南島の交流』、吉川弘文館、一九九九年)では同部分を「象頭骨」とすると紹介がある。下郡氏は「いかなる根拠をもって水辺に残された骨を象と判断したのかについては記されていないが、しかしかかる島嶼地域に象が生息していたとは考えにくい」とこの「象」の存在については否定的な判

断を記されている(同論文六五頁)。

(36) 秋山謙蔵「爪哇船の渡来と象の伝来」(『日支交渉史話』内外書籍、一九三五年)。なお、陳彦祥は太祖二(一三九三)年には暹羅解国(シヤム)の使節として来朝し、朝鮮滞在中に陳彦祥は「書雲副正」となった。この一行は朝鮮回礼使裴厚と日本へ向かうが、途中倭寇に襲われてしまったといわれており、シヤムが朝鮮だけではなく日本との通交も期待していたとする。

(37) 和田久徳「十五世紀初期のスマトラにおける華僑社会」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』第二十卷、一九六七年三月)

(38) 『群書類従』「補任部」巻第五十。応永十五年六月二十二日条。

(39) 小浜に漂着した爪哇使節一行は十一月十八日に暴風雨に遭遇し中湊浜で破損してしまう。応永十六(一四〇九)年十月一日に浜を出発した(『代々次第』「一色修理大夫満範条」応永十五年六月二十二日条)。なお、秋山氏はこの使節を陳彦祥ら一行と見なすが、小葉田淳氏、和田久徳氏は爪哇国に半属していた旧港の一行とみなす。和田氏は、前掲(37)論文で、船の派遣者である亜烈進卿について、亜烈はジャワ系の称号であり、この人物は、旧港宣慰使であった施進卿であると指摘されている。(小葉田淳「旧港及び其日琉両国との交渉について」『中世南島通交貿易史の研究』第三編第二章、刀江書院、一九

六八年。和田氏前掲論文。

- (40) 『武家年代記』(続史料大成十八) 下、応永十五年七月条。象の頭数は記録により異なる。『武家年代記』では、

「黒象三頭」とある。

- (41) 『東寺王代記』(『続群書類従』巻八五六)

- (42) 神宮寺の説明によると、現在の本堂は天文二十二(一五五三)年に完成したが、この角木の彫刻はそれ以前のものであると考えられるそうである。

- (43) 『実録』太宗十二年四月

- (44) 上林園とは、太祖三(一四〇三)年七月に、高麗以来の東山色を改めて置いた闕内司の一つである。宮闕(宮城)及び京・外苑園を管理した。(田川孝三『李朝貢納制の研究』東洋文庫叢書、一九六四年、二一三〜二一四年頁)

- (45) 『実録』世祖八年二月辛巳条。

- (46) 『実録』世祖十三年三月庚午条。

- (47) 『実録』世祖十三年七月丙子条。

- (48) 『実録』世祖十三年五月癸未・庚寅条、六月丁巳・庚申条。五月庚寅条では義教が「戯玩之物」を所望していたことがわかる。

- (49) 『実録』成宗八年十月丁未条。日本では白鳥(天鵝)は瑞鳥として知られるが、『実録』では干魚などと同等に扱われていることもあるので、朝鮮では食用の可能性もある。

- (50) 東京大学史料編纂所架蔵『日本関係朝鮮史料(二)』

所収。本来の目的であった成宗の元子ではなく先帝の元子であった月山大君に天鵝を下賜した理由は不明である。「分寶玉于伯叔之国、時庸展親」(『書経』「旅獒」)に倣った行為であろうか。また、この詩文はつがいの白鳥の様子を兄弟に例えて、成宗と大君との関係を詠ったともいえよう。

- (51) 『和漢三才図会』「鵠」(東洋文庫四六六、平凡社、一九八七年)。

- (52) 岡田章雄『動物』(日本史小百科一四、近藤出版社、一九七九年)七六〜七七頁。

- (53) 註52に同じ。

- (54) 田川孝三「鷹子進上」(註(44)所収)。

- (55) 註52、三十頁。

- (56) この「旅獒篇」についての解釈は小野沢精一『書経下』(新釈漢文大系二六、明治書院、一九八五年)四八一〜四八四頁に従った。

- (57) 田島公氏前掲(6)年表に、災厄のために動物を返却した例を数例確認することができる。さらに『明月記』嘉祿二年五月十六日条で、藤原定家が『旅獒』の一節を引いて宋朝の動物の存在を嘆いている。この件について、藤田明良氏は、外国の動物や人を穢れと直結させる觀念の影響力が公家の間で弱まっていたと指摘されている。

(藤田明良「南都の「唐人」——東アジア海域から中世日

本を見る――』『奈良歴史研究』五四号、二〇〇〇年九月）

- (58) 『実録』成宗十年二月丙申条。李仁畦のこの報告について、田中健夫氏は「当時の日本知識人の漢字文化に対する偏向した受容の態度」をあらわしていると指摘された。また、関周一氏は仁畦の他の報告を例に挙げて、「十五世紀末が近づくにしたがい、朝鮮使節の日本報告は、日本社会のマイナス面を強調する傾向にある」と指摘されている。（田中健夫「十五世紀日朝知識人の相互理解」『前近代の国際交流と外交文書』吉川弘文館、一九九六年。関周一「朝鮮王朝官人の日本観察」『歴史評論』五九二号、一九九八年八月。）

- (59) 明の鄭若曾が一五六一年に撰した『日本図纂』に収められた「倭好」には、「古書、五経則重書・礼、而勿易・詩・春秋」とある（田中健夫「倭好」覚書」（註（17）所収）。この傾向と偽政者の経書理解については、今後、検討していきたい。

- (60) この史料については、『大日本史料』文明十三年五月是月も参照した。

- (61) 『続善隣国宝記』（田中健夫編『続善隣国宝記、新訂続善隣国宝記』集英社、一九九五年）。

- (62) 新川登亀男「序論 贈与と請来の意味世界」（『日本古代の対外交渉と仏教』、一九九九年）四頁。

- (63) 稲川やよい「『渡海制』と『唐物使』の検討」（『史論』第四四集、一九九一年）。